

国際真宗学会第五回 大会に参加して

一 楽 真

はじめに

昨年八月二日～五日の三日間、カリフォルニア州立大学バークレイ校（UCB）を会場として開催された第五回国際真宗学会に参加して、早や九カ月が経過した。英語力もなく初めて参加した国際的学会であり、ほんの少しばかりを垣間見たに過ぎないが、参加者相互の熱のこもった議論に触発を受け、多くの問いを投げかけられたという印象は今もなお強い。報告と言うにはあまりに遅きに失してしまった。しかし、真宗学の置かれている現状とそこから要請されている課題を考えるのに、資するところがあればと思い、管見を記しておくことにする。また、併せて来夏に控えた本学会場としての第六回大会に向けての我々自身の関わりも確認することにした。

会の概要

国際真宗学会は設立されてから十年を迎え、現在では会員もハワイ・北米のみでなく、アジア・ヨーロッパ・南米に広がり、

その数は日本国内三〇〇余名、海外では四〇〇余名となっている。言うまでもないことだが、会の設立には西本願寺の海外開教が背景となっている。というより、開教の際に問題となる教員の研究会としての性格をもっている。それ故、設立当初から会員には西本願寺の開教監督や開教使が名を連ねている。ただ近年は、多くの仏教研究者などの参加を見て、宗派を超えた真宗研究の場として開かれてきているようである。会の活動として欧文真宗誌「Pure Land」が定期刊行されているが、その誌面からも学会の性格の推移を見ることが出来る。

大会は二年に一回の割合で開催されてきている。これまでの大会の開催年と会場は、左記の通りである。

第一回 一九八三年 龍谷大学

第二回 一九八五年 本派本願寺ハワイ別院

第三回 一九八七年八月六～八日 カリフォルニア州立大

学バークレイ校

第四回 一九八九年八月一～三日 本派本願寺ハワイ別院

本学からは、真宗総合研究所「海外仏教研究」の活動として、第三回・第四回の大会に参加している。

今回の第五回大会は、西本願寺の「仏教大学院（IBS）」とUCBが主催して行われた。「真宗学の回顧と展望」(The Shin Buddhist Studies: The First Decade, Retrospect and Prospect) という大会テーマが示すように、学会設立十周年を迎えるに当たり、これまでの学びを振り返るとともに、何を為していくべきかを確認することを目指すものであった。

大会は部会に分れることなく、参加者全員が一会場に集う形で行われ、参加者相互の交流を深めることにもつながっていた。参加者はいわゆる仏教研究者にとどまらず、開教使や信者の方も加え、三日間とも百人に及ぶ聴衆であった。

プログラムは、テーマをもとにした基調発表と討論形式のパネルと、いわゆる研究発表・質疑応答形式のセッションの二つから成っていた。かなりの数にのぼるが、すべての発表題目及び発表者を次に挙げておきたい。なお題目の邦訳は、事務局発行の「国際真宗学会ニュース」に拠った。

八月三日(土)

パネル1〈浄土真宗と宗教的対話〉

司会 リチャード・ペイン (IBS)

宗教的多元世界に於ける浄土真宗

アルフレッド・ブルーム (IBS)

仏教とキリスト教の礼拝対象

ルイス・ランカスター (UCB)

ライオネル・ルースクルッグ (コンコルディア大)

互いの眼を通して——浄土真宗とカトリックの対話

ケネス・クレイマー (サンノゼ州立大)

不拝世俗王——浄土真宗と社会倫理

ジェームズ・フレデリック (セント・パトリック神

学校)

セッション1〈浄土真宗の理論と実践〉

司会 フィリップ・アйдマン (IBS)

一乗海——親鸞の一乗の解釈について

那須英勝 (神学大学院)

曇鸞の浄土観

佐々木恵精 (京都女子大学)

親鸞とティリッヒの否定

野村伸夫 (京都女子大学)

金子大榮『真宗学序説』再考

安富信哉 (大谷大学)

世親『浄土論』の構造について

リチャード・ペイン (IBS)

本来的仏教としての浄土真宗

宮地廓慧 (IBS)

パネル2〈浄土教に於ける聖と俗の連係〉

司会 マーク・海野 (スタンフォード大学)

末法思想の中国的背景

ラッセル・カークランド (スタンフォード大学)

恵信尼文書にみられる女人往生

ジェームズ・ドビンズ (オベリン大学)

真宗学と世俗化

高 滴也 (龍谷大学)

米国仏教会 (BCA) の真俗二諦

デイヴィッド・松本 (ストックトン仏教会)

八月四日(日)

セッション2〈浄土真宗教義学の諸問題〉

司会 ルース・タブラ（ハワイ仏教研究所）

信心の近代化——信一念と清沢満之の信念

樋口章信（大谷大学）

現生正定聚について

紅樞英頭（相愛大学）

親鸞に於ける存在と時間

五十嵐明宝（大東文化大学）

真仏土について

松林芳秀（IBS）

セッション3 〈浄土真宗の現代的課題〉

司会 新井俊一（相愛大学）

性的差別と浄土真宗——悪人正機をめぐって

ジョン・庵原（龍谷大学）

人生経験の宗教的内容——浄土教の視点から

ゴードン・フアング、グレゴリー・フアング（サンフランシスコ在住）

フランシスコ在住

キリスト教の祈りと念仏——二宗教の類似と相違

チャールズ・ローマン（神学大学院）

八月五日（月）

セッション4 〈解釈と表現〉

司会 藤谷政躬（IBS）

仏教英語再考

ルース・タブラ（ハワイ仏教研究所）

真宗の基本原理の図式解説

花岡大学の仏教童話

稲垣久雄（龍谷大学）

パネル3 〈阿弥陀仏と浄土——概念とイメージの現代的変容〉

朝枝善照（龍谷大学）
司会 ケン・田中（IBS）

宗教的多様性と宗教的真理

ゴードン・カウフマン（ハーバード大学）

阿弥陀仏と浄土

海野大徹（スミス大学）

究極的指標としての阿弥陀仏

徳永道雄（京都女子大学）

法然と親鸞の宗教的象徴——阿弥陀仏と浄土

町田ソウホウ（プリンストン大学）

アメリカ的状况に於ける阿弥陀仏と浄土の象徴化

ケン・田中（IBS）

応対者 アルフレッド・ブルーム（IBS）

パネル4 〈真宗学は如何にあるべきか——解釈上の諸問題〉

司会 ジェームズ・ドビンズ（オベリン大学）

親鸞の思惟に対する上原専祿の解釈

ルーベン・アビト（南メソジスト大学パーキンス神学校）

浄土真宗の国際化に於ける概念化の問題

グスターブ・オ・ピント（サンパウロ在住）

浄土真宗のポストモダンの解釈

マーク・海野(スタンフォード大学)

応対者 多田稔(大谷大学)

また、八月四日の午後には、ツァーと晩餐会が持たれた。ツァーは貨切バスでワイン工場の見学に出かけ、晩餐会はサンフランシスコのグリーンズ・レストランで開かれた。尚、晩餐会の席上、ハーバード大学教授であるゴードン・カウフマン博士より、「不可思議なるもの——宗教的対話の成立根拠」と題して講演が為された。

これ以外に、八月三日の夜には、IBSの主催で会場をIBSに移して歓迎会が開かれた。出席者は四十名ほどであったが懇親を深めると共に、IBSの活動に触れる機会を得た。

本学からは多田稔教授をはじめとして十四名が参加した。特に真宗学・仏教学専攻の特別研修員・学生の有志が参加してくれたことは、今後の交流なども含めて大いに意義があったと思われる。

真宗学の課題

先に挙げた題目を見ても分る通り、発表はいわゆる真宗研究の枠をこえて多岐にわたっている。しかし私はそれらを二つの大きな課題として捉えることができるように思う。一つは、国際化という言葉に象徴されるが、普遍宗教として真宗を押しようとする課題である。それは真宗とは何か、真宗が言う人間の解放とは何か、これを世界の現状の中で明らかにしようとするものである。例えば、米国仏教会(BCA)所属の発表者から

アメリカの現実問題に真宗はどう答え得るか、という声も聞いたが、極めて実際の課題として真宗を明そうとしているのである。発表者の立場の違いによって比較宗教学的関心、或いは宗教的関心というアプローチに違いがあるのは当然であるが、学びの底に流れる課題が実際問題から始まっているという印象を強くうけた。

もう一つの課題は、第一の課題である真宗を明らかにする際の方法についてである。これは日本に住む我々にとっても大きな問題であるが、仏教の歴史を土台に持たない諸外国において、仏典を正しく読むことは如何にして可能かということが、我々の想像を超えて大きな問題になっているようである。そこに解学的方法が試みられたり、或いは異宗教との対話が重視され、取り入れられてきている。特に日系人への伝道だけでなくアメリカ社会への伝道という課題に取り組んでいる開教使の方々の声に接する時、日本にあるものを輸出するだけでは伝道にならないことを痛感させられた。翻訳の問題にしても、アメリカからアメリカの生活の中から再構築された言葉にならねば通じないかということが思われる。

このような状況の中で、今回の大会で本学の安富助教授が、金子大榮著『真宗学序説』を取り上げて、いわゆる宗学(Seon-arian studies)に簡易形で真宗学(Shinshu studies)の目的と方法を確認しようとしたことは非常に大切な意味があると思われる。

親鸞聖人の著述を研究するのは真宗学ではなくして、親鸞

聖人の学び方を学ぶのが真宗学である。〔『真宗学序説』三〇頁〕

という金子先生の指摘は、この言葉を初めて耳にする人にとっては、極めて新鮮で示唆を与えるものであったに違いない。何故なら、真宗の教義をどう理解し、解釈し、翻訳するかという課題に先立って、何の為の真宗か、如何にして明らかにできるのかを親鸞に学ばねばならないことを提起しているからである。これは同時に我々にとっても、改めて立場の確認を迫るものであった。この一点が明確でないならば、結局自分が持っている真宗理解を他に押しつけることにしかならない。

一例を挙げれば、親鸞は、時機を簡はず人間の迷いを超えさせる真実教として『大無量寿経』を掲げているが、その際に他の經典と優劣をつけることはしていない。ところが、長い教団の歴史においては『法華経』との比較の中で真実教が取り沙汰されてきているのも事実である。果してこれは親鸞の意図に順ずるものであろうか。その発想が更に現代において、国際化の名のもとに、真宗の普遍性を掲げようとする際に用いられてくるとすれば問題である。教の真実は迷いを超えることができた人間の誕生によって証明されるのであって、優劣を決めようとする論理構築によって証明されるものではないからである。そこにあるのは限らない自己正当化と諍論のみである。

安富氏の提言は、真宗、真宗学を自明のこととしてはならないという注意を喚起し、真宗学の出発点に立ち帰ろうとするものであった。この意味で、前に述べた二つの課題、すなわち真

宗とは何か、真宗を明らかにする方法（真宗学）は何か、に応答するものであったと思われるのである。

一々の発表についても、紹介・報告できればよいのだが、その能力も紙幅もないので、ここでは右の課題と連関すると思われるアルフレッド・ブルーム博士の提言を紹介しながら、真宗学の課題についていましばらく考えてみたい。^①

ブルーム博士については、紹介するまでもないと思われるが、ハーバードで神学を専攻され、後に浄土真宗本願寺派で得度を受けられ、現在はIBSの学部長である。著書の『Shiranu's Gospel of Pure Grace』(1965)は有名で、「親鸞とその浄土教」という邦題で翻訳出版もされている。

ブルーム氏の発表は『Shin Buddhism in Encounter with a Religiously Plural World』(宗教的多元世界との出会いにおける浄土真宗)という題目で、宗教的な多元世界の中で浄土真宗は他の宗教とどのような関わりを持ち、どのように影響し合うのかという問いを通して、真宗の持つ役割を確かめようとするものである。氏は先ず、現代の我々が文化的にも社会的にも政治的にも宗教的にも多元世界に生きており、孤立した共同体を生きているのではないことを認識する必要性を訴えている。そしてその多様な価値観の中で相互理解をもち、共に活動できる道を模索し、相互に傷つけあう戦争や環境破壊を回避しなげればならないと述べる。更に真宗が活力を有するものであるならば、このような現実問題に無関心であったり、逃げることはできないと述べている。

ここに氏の世界観及び宗教観の一端を窺うことができるように思う。すなわち、現実の諸問題と無関係に生きることはできないこと。そういう人間生活の意味と価値を問う発言するのが宗教であるということである。そして氏は、親鸞の思想に自らの立場を置いて、真宗が社会において果たすることができる役割について考えていくのである。

氏は親鸞の思想について触れる前に、「信念と宗派主義」という一節を設けて宗教の相互交流・相互対話の基点を押えている。そこでは宗派主義は、他の信仰を排し、軽んずる態度として定義され、宗教的闘争を生むものであると言われている。これに対して信念とは、その信仰をもつ、人の生活と活動の基盤であり、強いものである。しかも強いということは、他の信仰と比較する必要がなく、他を否定することもないと言われている。更に強い信念は何か頑迷さを連想し、宗教的対話の碍げのように思われがちだが、本当に碍げになるものは無関心であったり、強い信念はかえって対話を推し進めるものになると言われている。信念と宗派主義を混同してはならないという氏の提言は非常に興味深い。私自身、異宗教と言わず、異宗派間でも更には同じ教えを聞く人とさえ、宗教的対話には困難さを感じる。それに対して、それは独善を誇ろうとするからではないのか。本当に強い信念がないからではないのか。という氏の問いかけが聞こえるようである。

続いて氏は、このような強い信念を親鸞の信心に見定めている。親鸞の信心は聖道浄土の選びが極めて明確である、しかし

だからといって他の信仰を非難したり嘲笑することはなかった、他の見解に対して和合的であるように、弟子たちに促している」と述べている。ここでの氏の論拠になっているのは、いわゆる「念仏人々御中へ」の消息に出る親鸞の言葉である。

まず、よろづの仏・菩薩をかるしめまいらせ、よろずの神祇・異道をあなざりすてたてまつるともうすこと、このことゆめゆめなきことなり。(後略)

確かに、非難・嘲笑をいましめるものではあるが「和合的」と言えるかどうかは疑問の残るところである。『教行信証』に出る「教誡」の語に対する氏の見解を窺ってみたいところである。ただ、氏のここでの意図は、強い信念をもつていことが、他の信仰を否定することにはつながらないことの証明を親鸞の信心に見ることにある。それ故、この節の結びは、親鸞は自分の信仰を他に強要しなかった(他人の見解を認め、否定しなかった)証文として『歎異抄』の「面々の御はからいなり」を引いている。

次に氏は、親鸞における聖道浄土の選びに注目し、それが親鸞自身の宗教体験に止まらず、教相判釈の体系になっていることを取り上げている。そして二双四重の教判が単に自らの教えの優越性を論証しようとするものではなく、他の形態の仏教を本願に連関させる意図をもったものであるとしている。つまり、親鸞には聖道浄土の明確な選びがあると同時に、他の見解に対して和合的態度をとり真宗の信に連関する理論を構築したというのである。

氏のこの見解にはすぐに賛同しかねるが、先程から尋ねている通り、氏は宗教間対話の原理を親鸞の信心に見ようとしており、他の思想に対する親鸞の態度の表われとして教判を読みとっている。ここには、文字通り宗教的多元世界の真只中で、異宗教との対話の壁につき当たり、いかにして相互理解が可能かという出口を模索し続けてきた氏の苦渋の跡が見えるようである。それ故に、他の宗教に対する批判に関しても、自らの優越性を証明するために他を否定するような独善的批判が親鸞にはなかったことに注目することになっていったと思われる。

氏は結論的に次のように述べている。

真宗は、親鸞の教えの洞察力と意味に基づいて、現代人が直面している多くの問題を考察する際の手助けをすることができる。しかし気をつけねばならないのは、真宗は本質的に権威主義的宗教ではないということである。それは洞察を提示するものではなく無理強いではない。宣教的であるが、他人の見解や価値観を無視するものではない。親鸞は意見の異なった弟子を破門したりはしないだろう。

ブルーム氏の発言の底には、真宗が普遍的課題に答え得る「世界宗教」であるという信念が流れている。しかしまた、世界的であるということは他の思想を駆逐することを意味してはいない。他と優劣を競い、他を貶める在り方を氏は宗派主義・権威主義的宗教と呼び、親鸞の信心をそれと簡んでいる。そこには親鸞の信心に立ち帰らねばならないという氏自身の課題があると思われる。と同時に、氏の眼には親鸞の信心について語りな

がら、宗派主義・権威主義に墮している真宗教団の現実のすがたが映っているのかもしれない。

おわりに

以上、極めて簡単ではあるが、第五回大会について記してきた。全体の印象としては、初めにも述べたように、参加者の学びに対する真摯さを感じた三日間であった。特に、卒直な意見交換を聞いて、国内の学会では感ずることのできない雰囲気に触れた思いである。それは国際学会の通例であるのかもしれないが、逼迫した現実問題の中で、真宗の課題を明確にしたいという意欲の表われのように思われる。

これまでの本学会の歴史的経緯も知らずに述べるのは越権の謗りを免れないかもしれないが、本学会は次のような性格を持つことになっていくのではなからうか。

人間にとつての真宗を根本的に明らかにするための場所であること。そのために、誰に対しても門戸が開かれていること。統一の見解に人を導き入れようとするものでないこと（もしそうとすればブルーム氏の言う宗派主義に墮してしまう）。などである。教権主義や排他性の根には限りない自己正当化がある。その克服を国際真宗学会は課題として掲げているように思われるが、それはそのまま真宗を学ぶ者の不断の課題でもある。

註

① 第三回大会に関しては多田稔教授が、また第四回大会に関しては

箕浦恵了教授が参加報告を書いている。それぞれ真宗総合研究所

が月一回のペースで開かれている。現在は第五回大会の発表論文を

② 「研究所報」の第十八号と第二十三号に掲載されている。

③ ブルーム博士の論文については右の会での樋口章信氏の訳に負う

学会に参加する以外に、パークレイ東本願寺や東本願寺ロサンゼ

ところが大きい。記して謝意を表す。

ルス別院も回り、海外開教の現状に触れることができた。
また大会に参加した学生と安富助教授を中心に「欧文真宗研究会」